

児童の「文字通りではない言葉」の理解と視点取得能力の関連

常深浩平（いわき短期大学 幼児教育科 専任講師）

■研究活動概要

社会生活にとって重要な言葉によるコミュニケーション能力の発達過程を見ていくと、言葉の「裏」や「含み」の理解が必要な「文字通りではない言葉」の理解につまずく人がいる。例えば、お世辞や皮肉、謙遜、比喩などが「文字通りではない言葉」に含まれる。その難しさは、知的な遅れはなく、言葉を流暢に話すものの、他者とのコミュニケーションに著しい問題を抱える高機能自閉症の人たちが「文字通りではない言葉」の理解に困難を覚えることから端的に示されている。

この「文字通りではない言葉」を理解するには、当該の表現が持つ「重なりを持った複数の視点」に気づき、理解する認知能力が必要だと考えられる。そこで、本研究では、視点取得能力に着目し、大学生および小学生を対象に、「文字通りではない言葉」の理解との関連を検討した。また、「文字通りではない言葉」の理解と視点取得能力のどちらにも深く関わると考えられる読書経験との関連についても検討した。さらに、発達段階に合わせて視点取得能力を養う物語教材を作成し、「文字通りではない言葉」の理解に困難を持つ発達障害児を対象に、教材の効果の検討を試みた。

■成果概要

まず、読書経験について視点取得能力に関わると考えられる知覚的な処理、および読者自身の経験の記憶である自伝的記憶についての関連を包括的に検討するための調査を行った結果、登場人物の知覚的な視点に立つことで、その登場人物の心情理解が深まる可能性が示唆された（研究1）。また、研究1で見られた自伝的記憶が関与して生起する感情の1つが登場人物への共感であることが示唆された（研究2）。他方、「文字通りではない言葉」の理解に困難を持つとされる発達障害児を対象に、コミュニケーション場面における特徴を検討したところ、他者視点取得の困難さに特徴があることが示唆された（研究3）。以上の結果を踏まえ、研究4では、「文字通りではない言葉」の理解力を測定する課題、視点取得能力を測定する課題の妥当性の検討、および大学生における当該の能力の現状把握のために大学生を対象に質問紙調査を行った。その結果、社会的視点取得の得点が高い群の方が、低い群に比べ「文字通りではない言葉」の理解得点が高いことが示された。この調査をもとに、研究5では、「文字通りではない言葉」を獲得する年代と考えられる小学生用の課題を作成し、実施した。その結果、残念ながら「文字通りではない言葉」の理解と視点取得能力の間に明確な関連は見つからなかったが、物語の読書量と社会的視点取得能力の間には関連が見られた。研究4・5から、「文字通りではない言葉」の理解を含む物語教材を用いることで、視点取得能力を育成できる可能性が示唆された。そこで、「文字通りではない言葉」の理解を含む物語教材を作成し、「文字通りではない言葉」の理解が困難な発達障害児1名を対象に実施したところ、即時的な効果はみられなかった（研究6）。また、発達障害児が皮肉などの「文字通りではない言葉」を理解するプロセスは、定型発達児とは異なっている可能性が示唆された（研究6）。

■成果活用について

本研究で作成した物語教材について、京都大学こころの未来研究センターの研究プロジェクト「発達障害と読み書き支援」と連携し、研究活動の一環として行っている発達障害児を対象とした学習支援プログラムに参加する児童や保護者に協力してもらい、今後も継続的に使用する予定である。そして、効果の検証を行うと同時に、より効果的な教材となるよう調査・改善を続けていきたいと考えている。また、幼稚園・保育園・小学校、さらにそれ以上の年齢層での運用も検討している。

■今後の研究課題

今回の調査によって、視点取得能力と「文字通りではない言葉」の理解の間に、互恵的な関係があることが示唆された。今後の研究課題として、以下の3つを挙げる。第一に、「文字通りではない言葉」の理解と視点取得能力の関連のより詳細な検討である。第二に、「文字通りではない言葉」の理解を含め、読書活動に含まれるその他の認知活動についても広く視点取得能力との関連を検討すべきである。第三に、物語教材の実践の継続および改善である。物語教材を用いた実践の効果はまだ十分に検証されていないが、今後検討していくことが必要である。実践を続けながらより良い教材を作成できるよう、研究を続けていきたい。